

「助けあった民族が生き残った、、、」

菅野ひろみ 埼玉精神医療人権センター

見知らぬ人に、「あの時はありがとうございました。」と声を掛けられ、キョトンとする時がある。

たとえば、幼稚園の行事で、シーンとする中、泣きだした赤ん坊を必死にあやす母親。思わず手を差し伸べてあやしたこと、私はすっかり忘れていた。

だって、あんなに可愛い赤ちゃんを、大切なあなたの赤ちゃんを、見ず知らずの私に抱っこさせてくれてありがとう！私には、とてもハッピーな時間だったから、、、。

随分経ってから偶然町で見かけた私に、

「お礼が言いたいとずっと思っていたんです。あの時、嬉しかったんです。」と。あんな小さいことを覚えていてくれる程、あの時辛、かったんだね、、、。孤独だったんだね。

たったひとり、孤独に子育てする「ワンオペ育児」という言葉が聞かれるようになりました。大家族はもはや死語。核家族が当たり前になり、最近是非婚とか、孤独死とか。人の単位は集団ではなく、孤、という単位になりかわったかのようです。

便利になった生活は一見、人が一人で生きることを可能にしたかに見えますが、社会のあちらこちらで、小さな歪みを生み出していると感じます。

助ける方はほんの小さな労力なのに、困っている側にとっては、それがとても大きな助けになることがあるのかもしれない。

自分が差し出した手の事はすっかり忘れていても、差し出された手の事は忘れないもの。息子の苛めで苦しんでいた時、たった一人、先生に本当の事をこっそり伝えてくれたあの子。それをこっそり受け取って、外部の通報者からの情報として、その子も息子も守って下さった先生。

私は一生感謝し続けるでしょう。

もしあの時、あの子が本当のことを言ってくれなかったら、、、

それは、とても悲しい想像だから、、、。

私は人に手を差し伸べる人であり続けたい、、、。

誰かのためではなく、あの時の私へ差し伸べ続けているのです。

だから、

「助けあった民族が生き残った、、、。」

放課後の居酒屋さんでの先生の言葉、とても印象的でした。

自分を守るためには、空気を読んで見て見ぬふり。

それが生きる知恵なのか、、、と煩悶していた私には、新たな視点でした。

素敵な言葉を、ありがとうございました。